



武家らしからぬ書風である。雪にもかかわらず、突然に三人が長盛を見舞った。場所はどこか、亀山（現亀岡）から転じて任地とされた福知山あたりだろうか。長盛の館で二人は茶を味わった。そのあと三人はそそくさと引き上げたようだ。数々の土産の品をかえて迷惑とする長盛だが、不快に思っている言葉ではなさそうに見える。

「武家らしからぬ」と言えば、この人、井伊直孝の家臣岡本宣就の書状も、実に趣がある。嵯峨流という。連名ばかり三通ある。この書状は、そのなかでももっとも古いものと思われる。

御茶詰申儀ニ

付而、田中源左衛門

早々万事得人

可被仰談候、然者

明朝江戸御年寄

振舞被申候、鱸を

四五本御調法候而

可被下候、奉頼候、

明朝夜のちきあけに、

ここもとへ早着申候

様に頼入存候、

委々田中源左衛門

可申候、次われら壺

之儀頼入存候、

恐惶謹言

岡本半介

六月八日 宣（花押）

沢角右衛門

□（花押）

酒田宗有様

藤村三人様

人々御中

尚々、取紛候条、

一紙に申入候、

返々すゞきの事、

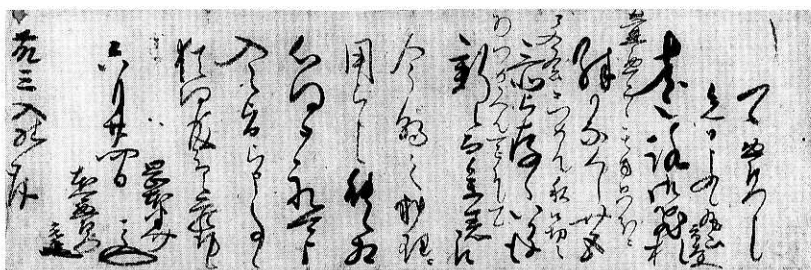
何様にも奉頼候、以上

通称を半介という岡本の後に名を記す沢村角右衛門も、同じく井伊家の家臣である。お茶についての詳細は、使いの田中源左衛門が口頭で言う。それよりも何よりも、「江戸御年寄」つまり幕府の幹部たちに振る舞わなければならないので、鱧を四五本調達して、朝一番・夜明けすぐ、つまり大至急届けてくれという。宇治川には鱧が遡上し、川上の鱧として名物とされていた。美味だったに違いない。これを半日あまりの内に、いやほとんど今すぐ持ってきてくれという。物理的に考えて、本状の発信地は伏見である。伏見には今日も井伊掃部の称を町名に冠するところ（近鉄丹波橋駅北側）がある。おそらくそこに営まれた屋敷で幕閣等がもてなされる手はずになっていたが、いざ明日という日になって、料理の材料不足が明らかになったようだ。大あわての様子である。時期は、元和九年（一六二三）の上洛時とするのが妥当だろう。宛名に併記される酒田宗有は、同じく宇治茶師で、三人とともに井伊家に入入りした。

下の書状も同僚の本郷惣左衛門との連名である。

「遠路」とあるから、少なくとも伏見ではない。国元の彦根だろうか。岡本は料理用の金串を贈られた礼を述べる。茶事に関わっているのだろうか。三人はずいぶんと重宝がらされていたようだ。このような実際の仕方は、江戸初期の茶師業のいわば常道だったのだろう。追而書は本郷からの伝言で、同じく家臣の丸山市大夫からの壺が思わしくなければ、手持ちのもので頼むという。茶師のもとへは、一人が何人かの壺をまとめて発注することがあった。

その次の「当地」は、おそらく江戸である。火事しかも夥しきとあり、また罷り上り、上方においてとあるので、寛永十一年閏七月、江



遠路御飛札殊、
かなくし廿五

忝被存候、いかにも

新候而参着申候、

今朝之料理に

用被申候、能々相

心得御礼可申

入之旨被申事候、

猶期後音候、恐惶謹言

岡本半介

六月廿四日 □(花押)

本郷惣左衛門

□(花押)

藤三入様御報

尚々、惣左衛門申候、

先日申入候丸山市大夫

壺悪候ハ、其方御つほに

被入御念御つめ候て、私口切之

折つめかへ候て可被下候、以上(42)

戸城西の丸全焼が思い浮かぶ。その年内に三人から火事見舞いがあつて、年明けしばらくしてから発信されたものだろう。

「御茶時分おいそかハしさ令察候」と結ぶが、たしかに、二月半ばと言えば、茶農家では菌畑の下骨や覆いの段取りをしなければならぬ季節である。

